



らのイナん #3

はじめてのおつか……うちあわせ編

著: 藍澤たすく

イラスト: かもめ遊羽

らのけんってどんなお話??

三郷^{みさと}学園高校「ライトノベル研究部」

——通称らのけん。

それは世にあふれるラノベを読みまくり、また自らも書きまくり、総合的にラノベへの造詣を深めることを主旨とした志^{こころ}しの高い部活動……のはず、なんだけれど……。アレ? 実際フタを開けてみたらなんか思ったよりなんかゆるくない?

だがしかし! それこそが「らのけん」の魅力! という感じで展開するまったく系日常部活コメディなのです!



緑川萌

ラノベと動物をこよなく愛する素直でまっすぐな女の子。その直情径行さゆえに突っ走ってしまうことがあるのはご愛嬌。



白井華子

らのけん顧問教師……のはずが、見た目が一番幼いのため、部員からも「華ちゃん」と呼ばれ親しまれる癒し系な存在。ラノベ大好き! だが酒乱。



赤城操

クールビューティーな眼鏡っ子担当。微に入り細を穿つ綿密な設定作りには、らのけん内でも定評がある。



黒田美玖

愛情表現がセクハラチックなボーイッシュ女子。いつもそのターゲットにされる華子の苦勞は、推して知るべし。何気にミステリラノベ好き。



青山一斗

らのけんの黒一点。なんにでもすぐに首を突っ込みたがる好奇心旺盛な性格の持ち主。

「「え〜!? 打ち合わせについてきてほしい〜!?」」

「うん……」

「おどろ
驚く「らのけん」部員、一斗と萌を前に華子は恥ずかしそうにそう応えた。
ほお
頬を朱に染め、唇をちよつとだけ尖らせ、顔の前で人差し指同士を合わせてもじもじして
いる。」

何このかわいい生き物。お持ち帰りしてもつといろんなことでもじもじさせてじっくり観賞
したい。

「今度の日曜日、初めてAG文庫担当の紺野さんと打ち合わせするんだけど……あたし正直怖
くつて……べ、別に横にいてくれなくてもいいから、喫茶店のそばの席で見守ってて……くれ
ない?」

華子が上目づかいでちらつちらつと一斗と萌の顔をうかがう。

「失礼ですが白井先生」

「は、はひっ!」

突然背後からした声に華子はびくつと肩を縮こめる。

「そういったものは御自分お一人で行かれた方がよろしいのではないですか? それとも白井
先生は就職試験の面接にも親御さんに同伴をお願いされるのでしょうか?」

そう言つて赤城操はメガネの中央を中指ですつと押し上げた。

「あうろう……」

操のあまりにももつともな指摘に、華子は言葉に詰まってしまったようだ。

「では私は今日は家の用事があるのでこれで失礼いたします」

そういうと操はすたすたと部屋を出て行ってしまった。

精神的にぼつんと取り残された華子は一人呟いた。

「……お願いしたもん」

「え？」

「あたし、この学校の面接試験の時もお母さんと一緒に来てもらったんだもん！ だって、だって怖かったんだもん！」

「……………」

予想外というか、ある意味予想通りの華子の言葉に一斗と萌は、やれやれという感じでちょっとだけ肩を凍めた。

さつき操の言葉に詰まってしまったのは、どうやらそれが凶星だったからのようだ。

「でもさすがにお母さんに実家から来てもらうのは気がひけるし、何よりあたしがラノベ書いてることはお母さんにもお父さんにも秘密なんだから！ 頼れるのはらのけんのみんなしかないんだもん！」

そう言つて華子は頬をふくらませて、ぶるぶると肩を震わせ始めた。

何このかわいい生き物。朝はこの振動と今のセリフをセットにしてお目覚めしたい。

「わかったよ、華ちゃん！」

「ふえ？」

涙目になり始めた華子の両肩を萌がガツシリ掴む。

「打ち合わせ、ついてっであげる！ 青やんも行くよね？」

「うん、俺もちょっと興味あるかな」

「あたしは華ちゃんのここに興味があるぜ！」

「ひゃんっ!?」

突然華子は後ろからがっしりと胸を鷲掴みされた。

振り返るとそこにはにこやかな笑みを浮かべる黒田美玖の姿があった。

「ちよ、ちよつと黒田さん、やめてくださいー！」

「あたしもさ、打ち合わせついていってあげてもいいんだよ？ でもね、さすがにタダつてわけにはいかないじゃらん？ というところで打ち合わせ同伴料は体で払ってもらうぜい」
♪

「く、黒田さんについてこなくていいから放してくださいー！」

「まあまあまあ、よいではないかよいではないか♪」

「いい加減にしないと本当に……あふっ……怒りま……ひゃんっ……怒り……そ、そこだけは

らめえ……」

ともかくにも華ちゃん打ち合わせ支援部隊はこうして結成されたのだった。

日曜午後。

ついに決戦……いや、打ち合わせの日がやってきた。

場所は駅前の喫茶店。もう50年以上ここに居を構えてきた老舗である。

その最奥のテーブルに華子がかちんこちんになって座っている。

昨日の夜から何度も頭の中で打ち合わせの模様をシミュレーションし、イメージトレーニングしてきたのだが、それをすればするほど逆に緊張が増してきて、今や手が震えすぎて眼前のお冷のコップも持てないほどの有様だ。

「あゝあ、華ちゃん、がちがちだよ……」

「あんなんでまともに編集の人と話せるのかね?」

「いーじゃん、面白いじゃん。あたし達はただ温かく見守ってやればいいんじゃないかね?」

華子からふたつ離れたテーブルに座っているのは萌と美玖と一斗。

約束通り「そばの席で見守って」あげているのだが、それが華子の眼中に入っているかは

甚だ怪しい。この調子だと緊張のあまり視野狭窄を起こしている可能性すらある。

「しようがないなら、まずはリラックスさせてあげるか……」

萌は手許のスマホをびびつと操作した。

「はうっ?!」

と、同時に華子は小さく悲鳴を飲み込んだ。

脇の席に置いておいたスマホがLINEの新作を知らせる音をいきなり鳴らしたからだ。

「あわわわわ……」

華子のはあわててスマホをマナーモードにすると、その画面を確認した。

【華ちゃん、緊張しすぎだよ。とりあえず、手のひらに「人」って3回書いて飲み込んでみて。

そしたらきつと落ち着くから】

そこには萌からのナイスアドバイスが!

華子はそれを確認すると、顔を上げ、萌に向かって真剣な表情で頷いた。

そして。

「入、入、入……ごっくん!」

「入」と手のひらに3回書いてそれを勢いよく飲み込んだ!

【ありがとう、緑川さん。少し、落ち着いてきました。みんなに見守られていると思うと安心できるし、この後の打ち合わせ、頑張ります!】

萌のLINEに華子からのメッセージが表示される。

「気のせいかもしれないけど、いま華ちゃん、『人』じゃなくて『人』って書いてなかった?」

「まあ、効果あったみたいだし、いんじゃないね?」

「ま、そうだね」

「華ちゃん、あれだよ、あとは編集さんをかほちゃと思えばさらに緊張しなくなるよ。編集さんにかほちゃ! OK?」

萌の追加メッセージに華子はこくこくと頭を縦に振る。

「編集さんにかほちゃ……編集さんにかほちゃ……怖くない怖くない……」

華子はぎゅつと目をつぶってそれを呪文のように繰り返していた。

カラコンカラコン♪

入口のドアベルが軽やかに鳴った。

と、同時にかほちゃ……じゃなくてAG文庫編集部^{つかさ}の紺野司^{つかさ}がその姿を現した。

司は奥のテーブルに華子の姿を見つけると、颯爽とした様子でこちらに向かつて行つた。

「白井さんですね? すみません、前の打ち合わせが押して少し遅れてしまいました。AG文庫の紺野です。今日はよろしくお願いいたします」

「は、はい! こちらこそよろしくお願いたします!」

椅子から立ち上がって直立不動の姿勢をとってからぺこりとお辞儀をする華子。

(やだ、紺野さん、超かっこいい……)

頭を下けたまま、華子の頬は真っ赤に染まっていた。

長身の上に乗った造作の整った顔立ち。優雅な身のこなし。吸い込まれそうに綺麗な瞳……。その瞳にふわりとかかるサラサラヘア……。それはジャーニー○所属のアイドルです、と言われなくても納得してしまうようなかっこよさだった。

「華ちゃん、お辞儀したまま動かなくなつたよ?」

「どうせ『やだ、紺野さん、超かっこいい……』とか思っただんじやないの?」

「それはないだろ」

「いや、あれは華ちゃんの好みのタイプだとあたしは見たよ。華ちゃんの好きなラノベキャラってほしいなああいうパターンが多いもの」

「あれが? あんな優男^{やさおとこ}みたいなのが華ちゃんの好みなの?」

萌と一斗と美玖は興味津々な様子で司を見つめ始めた。



「いや、失礼ですが、白井さんがあんまりお若いんでびっくりしました。まだ女子高生でも……本当は小学生でも……」全然通用するんじゃないですか？」

司は艶のあるハスキーボイスで華子に語りかけてきた。

「……」

「高校で教師をされているそうですが、担当科目は何をしてらっしゃるんでしょう？」

「……」

「白井さん？」

「はっ……はい、すみません、なんででしょう!？」

華子はハッと我に返った。

司があまりにもかっこよくて……しかも華子が大好きなラノベ「グルガナル戦記」の主人公・アルバート王子にそっくりで……つい見惚れてしまっていたのだ。

（い、いけないわ華子！これは仕事！お仕事なのよ！いくら紺野さんがかっこいいからってそんなことで上の空うわそらになってたらこの先作家なんてとてもとて……はああく、かっこいいわ〜♥）

「なんか華ちゃんどろけてね？」

「どろけてるわね……大丈夫かしら？」

先ほどのガチガチの緊張状態から一転、軟体動物みたいになってしまった華子を、萌と一斗

は心配そうに見守るのだった。



「ブレンドとウインナーコーヒーとアップルパイ、お待たせいたしました！」

「はい、ありがとうございます……つて、ええ!？」

注文の品を運んできたウエイトレスの顔を見て華子は絶句した。

「パイはお切り分けいたしますか？」

「そうですね、お願いします！」

笑顔で司にそう質問したのは……誰あろう、黒田美玖その人であった！

（ちよ、ちよつと黒田さん何やってるの!? 遠くで見守ってくれるだけでいいって言ったじゃない!?)

（まあまあ、華ちゃんいいからいいから。あたしに任せておけば全部うまく行くって!)

（何を任せるって言うのよおおお〜!! あたし不安しか感じないよおおお〜!!)

「お客様は恋人同士でらっしゃるんですか？」

「は？」

美玖の唐突な質問に司はちよつと戸惑いを見せた。

その対面では華子があまりの展開に凍りついている。

「いえ、なんだかとおも似合いで……すごくラブリーな雰囲気が出ていたものですかあ〜」

（黒田さ〜〜〜ん！ もう黙って！ 黙ってそのまま向こう行つて！ なんなら地球上からもういなくなつて！ 消滅して!!）

とんでもない事を言い始めた美玖を、華子は視線で人が殺せるぐらいの目力をこめて睨みつける。

しかし美玖はどこ吹く風、爽やかな笑顔を浮かべて司の答えを待っている。

「いえ、とんでもない……勿論白井さんのようなキュートな人が彼女だったら、それは幸せだと思いますが……今日は仕事の打ち合わせで来ていますから」

「――」
不躰な質問に嫌な顔ひとつせず、にこやかに応える司。

そしてその予想外の応えに華子の心は千々に乱れ始めた。

（え？ え？ 紺野さん、あたしみたいなタイプ、嫌いじゃない……ってこと？ やだ、あたし、ドキドキしてきちゃった……!）

「そうですね〜 それは失礼いたしました〜 ではごゆっくり〜」

美玖は司に見えないように、華子に向かって小さくサムズアップしながらその場を去った。



「ちよつと黒たん、何やってるの!? 遠くから見守るだけって言ったでしょ！ ルール違反だよ、もう!」

「悪い悪い、あんまり華ちゃんがとろとろだったからさ〜つい面白くて行っちゃったんだよね〜★」

「で、どうだった？ 華ちゃんの様子？」

「うん、あの紺野って人、華ちゃん結構タイプっぽいよ。華ちゃんは華ちゃんでもう当然とろとろでメロメロだったし」

「マジで!」

「これはひよつとするとひよつとするかもよ〜」

そう言つて美玖は「いししし」と悪い顔をして笑った。

こうなると俄然華子と司の今後が気になつてくる。

「あ〜、くっせ〜、でもこの距離だと何喋ってるかまではわかんね〜な。読唇術でもできればな〜」

「ふっふっふっ、それなら万事抜かりはね〜わよ」

「どしたの、黒たん？」

いきなり不敵な笑いをし出した美玖を萌がきよとした表情で見つめている。

「ちやちやららっちやらら、盗く聴く器」〔※ドラ○もんが道具を出す感じで〕

「おぉー!!」

「これを先ほどのテーブルにセットしてきました」

「さっすが、黒たん！ あたし達にできないことを平然とやっつてのける！」

「そこにしびれる憧れるうー！」

というところで3人は早速盗聴器のレシーバーから伸びたイヤホンをそれぞれの耳にセットしたのだった。



「なるほど、白井さんはそんなにミーアキャットがお好きなんですな？」

ブレンドに口をつけながら、司が興味深そうに華子に問いかける。

「はい？」

華子はほかんとした顔になった。

何しろ先ほどの美玖ショックの後も、ずっと司に見惚れていて、司が何を喋っていたのか、

正直全然覚えてなかったからだ。なんだったら今初めて我に返ったぐらいの勢いだ。

そして夢うつつのまま司の話に相槌を打っていたら、いつの間にか自分がミーアキャット大好きっ娘という流れになっていた。

どうしてこうなった!?

（あ、あうううう……ど、どうしよう……このまま何も応えられなかったら、あたし「人の話を全く聞いてない」&「その上何も知らない」最低の女になっちゃうようー！ あああああ、どうすればいいの……あっ!?)

その時、華子の視界にテレビ番組のADよろしくカンベを掲げて示す萌の姿が目に入った。

「ミーアキャットはその可愛い外見に反して凶暴な性格の持ち主。別名「サバンナのギャング」と言われるほど」

「そ、そうなんです。あの可愛い外見にそぐわない獠猛どらもうな性格……「サバンナのギャング」と言われてしまうほどの、そのギャップが好きなんです」

「へえ、ミーアキャットってそんなに獠猛なんですか。それは知らなかったですね」
（萌のキャンベ丸パクリの）華子の応えに、司は素直に感心する。

「それとミーアキャットは天敵の鳥を非常に怖れていて、上空を飛行機が飛んだだけで逃げだしたりするんです」

「あとミーアキャットは鳥が天敵なんですけど、飛行機も鳥と間違えて逃げたりするんです

係とかどうですか？ それとも白井さんの方で良い案があればそれを縦軸に据えるのも全然ありだと思えますけど？」

「レンアイデ、イイカト、オモイマス……」

華子の心の叫びをよそに、司がガンガンと前向きにアイディアを出してくる。

と、同時に華子の逃げ場がどんどんなくなっていく……！

(どうしよう、どうしよう……)

もはや完全に動物ラノベを書く流れになってきている事態に、華子はぶるぶると肩を震わせ始めた。

(や、やっぱり正直に全部話して、謝って、お断りしなくっちゃ……だって動物ラノベとかあつたし絶対書けないし……)

しかしその瞬間、突然司が華子の両手を、自身の両手で包み込むようにしっかりと握りしめた。

「!?」

「これなら絶対売れます！ これでいきましょう！」

司の手の温かさが華子の手を通して伝わってくる。

そして真剣な瞳が華子を見つめている。

そう、サラサラヘアーの下にあるキラキラアイが華子を真正面から見据えているのだ。

華子はその熱い視線にがっつちりと絡め取られ、恍惚とした表情になった。

華子の思考回路はもうショート寸前だった。

「……はい、わかりました……あたし、頑張ります……」

「ありがとうございます！ じゃ、プロット出来たら連絡ください！ 楽しみに待ってます！ では私は次の打ち合わせがありますので！」

カランコロンカラ〜ン

諳言のように華子が応えると、司は満面の笑みを浮かべながらさっと会計を済ませ、来た時同様、颯爽と去っていったのだった。

「動物……擬人化……女の子……バトル……恋愛要素……動物……擬人化……女の子……バトル……恋愛要素……」

そのあとには謎の単語をお経のように繰り返す華子の姿があったのだった……。



その後、萌の助けを借りつつ、どうにかこうにか苦心して組んだプロット「スーパー女の子大戦 featuring シーアキャット」は、なんと一発OKが出て華子はその原稿の執筆に入るこ

になっちゃったのだ……。

「無理だよお〜プロットでもあんなに苦労したのに原稿なんてもう書けないよ〜！」〔華子〕

「まあまあ、あたしも助けてあげるから頑張つて書こうよ、華ちゃん★」〔萌〕

「むーりー、むーりー!!」〔泣〕〔華子〕

つづく

●「らのけん!」シリーズ掲載号一覧

G A文庫マガジン2014年7月24日配信号…らのけん!

G A文庫マガジン2014年9月合併配信号…らのけん! 2 夢の最終選考編